

異常な朝

1

痛ッ！

イタタタタッ。

何これ——頭痛？

ひどーい、まるで頭の中が建築現場みたい。

大型ハンマーが束になって脳みそ、打ち付けてるー。

ガンガン響いて息もできない。

目えも開けられへんやん！

なんでこんな急に。

そりゃ日頃から全然言うこと聞いてくれへんおつむやけど、こんな拷問みたいな初めてやわ。

うー——、いつまで続くんかなー。

ああ、わたしったら、いつの間にかタオルケットに噛みついてたわ。ちょうどミッフィーちゃんのイラストのお耳のところに。恨まんとってなー。

……。

ああー、少し痛みが引いてきた。

永遠に続いたらどうしようかと心配した……。

一時間も我慢してたような気がするけど、たいがいこんなのとて、一分か数十秒ぐらいのこと。

まだズキズキと痛むけど、ハンマーだったのが、小学校の時の先生の拳骨くらいになってきた。あともう少しの辛抱や。

タオルケットから口を引き離す。薄目を開けてみる。なんや、まだ夜明け前やん。

頭痛に邪魔された分、もう一眠りさせてください。お願いします、神さま仏さまミツフィーさま。

目覚まし時計が、りんりんと鳴ったようだ。

誰かが「起きなさい」と声をかけたようだ。

まどろみの中、どちらも遠い汽笛のように、おぼろに聞こえた。

ようやく、ぱつちりと目覚めた両目に飛び込んできたのは、カーテン越しの残暑厳しい陽光に照り映えた、乳白色の天井だった。

「しまった、起きなきや！」

萌黄もえぎは、タオルケットを蹴り飛ばすと、反動をつけてベッドから降りようとした。

ドンッ。彼女の行動は正体不明の障害物によって阻まれた。つまり、膝をイヤというほど激しく壁にぶつけてしまったのだ。

萌黄は跳ね返されてベッドの上に大の字になった。

「……だ、誰よ、こんなところに物を置いたりして」

彼女は膝を左手でさすりながら、右手をベッドの右側に伸ばした。

確かにそこには厳然として障害物が存在した。しかし指の手触りがさらに彼女の頭を混乱させた。

「これって、壁紙じゃないの……」

急におかしさが込み上げてきた萌黄は、お腹を抱えて笑い出した。わたしってば上下ひっくり返って寝てたんや。あはは——げっ、てことは北枕？ ヤバヤバ。

萌黄はベッドの上に上体を起こすと、今度はゆっくり、壁と反対方向に足を向け、カーペットの上に降り立った。光に誘われるように窓辺に進み、カーテンをサッと開いた。細かな波ガラスなので外の景色は見えない。彼女の住む家はマンションの六階であり、窓の外はすぐ共用通路に当たっているからだ。

萌黄は、大きなあくびを噛み殺しながら室内を振り返った。その瞬間、彼女は自分の目を疑った。

部屋は、間違いなく自分の部屋である。

ベッドがある。中学の頃から使っている勉強机がある。その脇にはパソコンデスクもある。ファンシーケースもある。お気に入りのトートバッグも、くまのプーさんのぬいぐるみも、オレンジ色の小銭入れも！

全部、見慣れたもの、使い慣れたものばかりだ。なのに、この違和感はどうだろう。

萌黄は一瞬、笑いそうになったが、やがて背中から迫り上がってきた恐怖の波に、全身が総毛立った。彼女は窓に寄りかかりながら、ずるずるとカーペットの上に座り込んでしまった。

まぎれもなく自分の部屋。

まぎれもなく普段使い慣れたものばかりというのに。

そのすべてが、まるで鏡に映したように“逆”、つまり、左右が正反対になっていたのだ。

2

——これはきつと夢だ。

萌黄は両手で顔を覆った。かすかなめまいが彼女を襲う。でも、めまいなら慣れっこだ。三年前、高校に入学した頃、突然体調を崩して自律神経失調症と診断されて以来、めまいは彼女にとって日常のありふれた生理現象の一つになっていたから。

揺れ出したら、目を閉じてじっとしていること。そうやってめまいが収まるのをひたすら待つ。今日のような時は、原因が異常な視覚情報であるだけに、彼女はなおさら力を込めて瞼を閉じた。

コチコチコチ。アナログ時計の単調な音。

プアーン。窓の下を通り過ぎる快速電車の音。

アハハハハ。通学途中の誰かが笑う声。

耳に届くのは、何の変哲もない、ごくありふれた朝の様子だ。なのに……。

座ったまま、萌黄は両足を体の方へと引き寄せた。足の裏がカーペットをズズズとこする。その慣れ親しんだ感触が、彼女を急速に現実へと呼び戻した。

——もしかして“どつきりカメラ”？

ずっと昔、テレビでやってた番組だ。芸能人をだまして異常なシチュエーションに追い込み、その驚きあわてるさまを楽しもうという企画だったと記憶している。

——まさか。わたしなんか“どつきり”仕掛けて、

どんな意味があるの？ 誰がそんな酔狂なことを？

……でも他に考えられない。だとしたら、いったい誰がどんな魂胆で……？

むくむくと湧いてきた好奇心が恐怖を上回った。萌黄は、おそるおそる顔を上げると、あらためて部屋の中を眺めた。

廊下に出る扉は、本来左側にあるはずだった。それが右側についている。ベッドの位置も右の壁際だったのが左にある。壁に貼られた好きな若手俳優のポスターさえ右だったのが左。そして奥の壁に作りつけの衣装戸棚ま

でが反対の位置にある。

なんて手の込んだ仕掛けだろう。どれぐらいのお金がかかったろうか。

萌黄は思いきって立ち上がった。赤いヘルメットをかぶった男が『どつきりカメラ』と書かれたプラカードを持って登場するまで待つつもりはなかった。

まずは勉強机に近寄ってみる。あらためて萌黄は感心した。見事に正反対に作られている。右側に付いていた引き出しは左に移動してるし、電灯スタンドもいつもの反対側に置かれている。もっとも置き場所は移動させれば済む話だが、よく見ると、光量を調節するつまみの上の1、2、3の数字が裏返っていた。

机の上には、数冊の読みかけの本が放り出してあった。どれも表紙の文字が左右反転していた。

「普通ここまでやる？」

次に萌黄が手を伸ばしたのは、本の脇に置いたままの小銭入れだった。ファスナーを開けて、中から百円玉をひとつ取り出してみた。

予期していたものの、「100」が「001」（もちろん1は反対向きだ）になっている。彼女は、間違えて虫でもつかんでしまったように、あわてて机の上に投げ捨てた。

次に、正面の壁に貼られたカレンダーに目をやった。

年号の“2014”が、やはり左右逆。各月は右側から並ん

でおり、日月火の曜日表記も併せて裏返ったまま右から左へと並んでいる。見にくいことこの上ない。——いや、そういう問題じゃない！

カレンダーには簡単な予定が赤ペンで記されてあった。もちろん萌黄の手書きだ。驚いたことに、そのひとつひとつが彼女の筆跡のまま、忠実に裏返してあったのだ。

萌黄はとうとう腹が立ってきた。これはもう冗談を通り越して悪趣味だ。笑い過ぎてなんかいられない。手間暇かけて、こんないたずらを仕掛けて、わたしにどうしろと言うのよ！

彼女はまなじりを決すると、肩を怒らせて扉へと歩み寄った。ドアノブをぐいとつかみ、バツと手前に開く。しかしそこにはプラカードを担いだヘルメット男の姿はなかった。

廊下に出た萌黄は、左右をきよろきよろ見渡した。右手に玄関があり、靴やサンダルが並んでいる。左に目をやると、奥まったところにあるリビングの大きな窓越しに、朝の陽光がフロアリングの床を照らしているのが見えた。もちろんすべて記憶の中の自宅とは正反対だ。

家の中はしんと静まりかえっている。

萌黄は、まるで知らない家を探索するような、変な気持ちのまま、廊下を左へと進んだ。

その時、何者かが彼女に向かって飛びかかってきた。

「ひゃっ」

警戒していたつもりなのに、萌黄は完全にふいをつかれた。反射的に飛び退いた彼女は、トイレのドアレバーにしたたか腰を打ち付けてしまった。

「……………」

声にならない声が口から漏れた。

萌黄にダメージを与えた相手は、すぐに彼女から離れた。そして引き戸が開いたままの和室に駆け込むと、身軽に和箆笥の上に駆け上った。

「ニャー」

萌黄は腰をさすりながら恨めしげに三毛猫を見上げた。

「ウイルじゃない。ひどいよー」

飼猫のウイルは萌黄の非難などどこ吹く風といった顔で欠伸をしている。それでも萌黄は、敵地で味方に出会った気がして、ウイルに近寄った。もちろん和室の中も逆になっている。畳の一枚一枚が逆になってるかどうかまでは判らないが。

「おいで」

萌黄が手をさしのべると、ウイルはまた一声ニャアと鳴いた。この家に来て三年になるオス猫は家族の大切な

一員であり、萌黄は何度彼に慰められたことか。その彼は、やさしく呼びかけられて、ひよいとジャンプすると萌黄のふところに飛び込んできた。

「おまえも、どつきり」の犠牲者？ 腹立つよねー」

毛並みのいい背中をなでながら話しかける。その手がピタッと止まった。

「……耳、どうしたの」

萌黄の声が強ばった。猫は飼い主の感情を敏感に察知したのか、彼女の腕をかいくぐると畳の上に飛び降りた。

「なんで、なんで！」

今度こそ最大の衝撃が彼女を襲った。

ウィルは以前から右耳の先っぽが欠けていた。一年前、表に出たとき、近所の犬に噛まれたせいだ。なのにいま萌黄の前にいる猫は左耳が欠けていたのだ。

萌黄は我慢の限界に達した。

逃げるように和室を出ると、リビング兼ダイニングの窓際に駆け寄り、床まで届く丈の長いレースのカーテンを両手で左右に押しひろげた。

もはや驚かなかった。天井から床までの一枚ガラスの向こう、バルコニー越しに見えたのは、萌黄の記憶にある風景を正確に裏返したものだ。本来は右下にあるべきI美容院は左にあり、左端でレンガ色の壁を見せて

いたO和服専門学校は右端に移動している。そして、書き割りに描かれた絵では？という疑念を打ち消すように、小さく見える人々が普通に動いている様子が、遠目にも見て取れた。

決定的なのは、朝日が右から昇っていたことだろう。バルコニーは南向きである。これでは懐かしのアニメソングだ、西から昇ったお日様だ。

萌黄は敗北感に打ちひしがれて、カーテンから手を離れた。どうやら、おかしいのは自分の方なのだ。そう結論付けた彼女は、食卓テーブルに両手をついた。

テーブルの上には、母親の置き手紙があった。彼女はそれを持ち上げ、テーブルの向こうにある食器棚のガラスに映してみた。

“今日は早番なので先に出ます。

とじまりはきちんとして行ってね”。

間違いなく母親の筆跡。いつもパートに出かけるときを決まり文句を書き連ねてあるだけだ。

萌黄は手紙を放り出し、がつくりうなだれたまま、リビングスペースのソファの上に、背中からダイブした。

ソファはいつものように彼女の背中を温かく受け止めた。

「わたしの頭、とうとう反乱起こしたのかな……」

萌黄の目に、うつすらと涙が浮かんできた。腕にウィルがのどをゴロゴロ言わせながら登ってきた。萌黄がウィルの体を両手で抱きすくめた時――。

ピンポーン。

インターホンが警笛のように鳴り響いた。その音は部屋の空気だけでなく、萌黄の心臓まで激しく震わせた。

――だ、誰？

ソファの上に身を起こした彼女は、応答すべきかどうか迷った。こんな状態で他人とうまく話せる自信はない。居留守を使おうか？

インターホンが再度鳴った。萌黄は腹をくくるとソファから立ち上がってインターフォンに近づいた。そして唾を飲み込み、ゆっくり受話ボタンを押した。

4

インターホンの液晶画面が明るくなると、若い女性の顔が大写しになり、

「もっえーぎちゃーん、あ・そ・ぼ」

と調子つばずれな声で呼びかけてきた。

「むん！」

相手の正体を知って、萌黄は号泣しそうになった。訪問者は萌黄の友人、いや無二の親友だったのだ。

萌黄は画面脇のボタンを押して、階下エントランスのオートロックを開錠した。

地獄に仏。まさに彼女の心境はこの一言に尽きた。

萌黄はあたふたと玄関にたどり着くと、扉の鍵を逆回しに開くのももどかしく、表の共用廊下に飛び出した。

エレベーターの音が聞こえ、やがて親友がその姿を廊下に現した。

「むーん！」

萌黄は大きな声を上げて駆け寄り、親友の首に抱きついた。

「昨日会^おうたばかりなのに、えらい熱烈歓迎やん。でも萌黄い、あんたなんでパジャマのままなん？ もう出かける時間でしょうが」

相手の困惑をよそに、萌黄はしばらく腕を解かなかった。

舞^{まい}風^{かぜ}むん。

彼女は、小中高校と、萌黄と席を並べた幼馴染みで、今年の春、めでたく同じ大学の同じ学部に進学した。

だが――。

「むん、ちよっと家の中に入って」

萌黄は哀願する顔で、親友の腕を引いた。

「あんまり時間ないよー。どないしたん？」

「いいから。……聞いてほしい話あんねん」

「しゃあないなー。十分ぐらいやで」

萌黄は、ぐずる相手を玄関に引きずり込んだ。

「萌黄は絶対一人じゃ起きられへんからって、あんたのお母さんに頼まれたから、わざわざ——」

そうだった。萌黄は昨日、彼女が家に遊びに来たことを思い出した。そんな会話が母親と彼女の間で交わされたような気がする。

「いいから、お願い」

萌黄は、むんに靴を脱がせると、背中を押してリビングへと導いた。むんは出迎えたウィルのニヤアという声におつすと挨拶すると、ソファの上に優雅に座った。

実際、むんは萌黄より頭半分身長が高く、足も長くてスタイルがいい。今日もスリムジーンズにTシャツ、その上に白いジャケットを羽織ったいでたちが、さらさらの長い髪にマッチしていて、萌黄はつい見とれてしまう。

「むん、忙しいみたいね」

萌黄は冷蔵庫を（逆に）開けて、ジュースのペットボトルを取り出すと、栓を（逆に）回して開けてコップに注いだ。起床からまだ三十分と経っていないのに、すでに“逆境”に順応し始めている。萌黄は少し哀しくなった。

「——うん、被害者の遺族らで作った団体の結団式が、今日梅田であるから、ぜひ参加しろって」

「やっぱり保険金、降りへんの？」

「まだ判らへん。何が原因かも不明やから。保険会社があかんかったら政府に金出させようって、みんな息巻いてるわ」

「地殻変動が原因だつてテレビで言うてたけど？」

「北海道だけがスカッと消えてしまうなんて、あり得ると思う？　どこかおかしいわ」

むんの家族は、今年の六月に起こった北海道消滅事件の被害者だ。彼女の両親と弟が運悪く北海道を訪れた日に悲劇は起こった。いや悲劇かどうかとも判らない。なにしろ北の大地が、まるで大きなスコップですくい取られたように忽然と消えたのだから。

その日、どこの地震計もほとんど針は振れなかったという。ある科学評論家は「まるで水の中に吸い込まれたように、北海道はなくなった」と言った。

むんは家族の遭難を知ると、すぐさま現地へ向かった。しかし彼女にできたのは、下北半島の突端から、どす黒く渦巻く海を見つめることだけだった。

5

事件の翌七月、北海道があつた地域（海域）に入ることが全面禁止された。危険が去つたとは言えないとして、

各種マスコミをはじめ、献花を要望する遺族の現地訪問すら拒絶された。

マスコミは連日、そんな政府の横暴を叩き、隣国が使用した新型爆弾が原因ではないか、いや巨大な隕石が落下したのだと、勝手な憶測を並べ立てた。

政府も一応は「局所的な大地震によるもの」と公式見解は述べたものの、詳細には全く触れず、現在は近隣諸国が持ち出してきた「新たな領海を決め直すべき」という問題に頭を悩ませているらしい。

その辺になると、萌黄にはよく判らない話になってくる。しかし彼女にとっての最大の問題は、親友であるむんが家族を亡くし、入学して半年にしかない大学を休学したということだ。

むんは当初、学業を続けるのは無理と判断し、退学を申し出たが、大学側はむんの立場に深く同情し、四年間の学費を免除すると太っ腹なところを見せた。むんに言わせれば「学内の被害者がわたし一人だったからよ」とのことだが、彼女はありがたくその申し出を受けた。その辺はさすが、ちゃっかり・むんだ。

しかし両親の生命保険がおりないとなると、生活費を稼ぐ必要があった。彼女は一年間の休学を願い出て、いまは毎日、仕事に精を出している。

その割を食ったのが——萌黄である。小中高とむんの

そばを離れたことのない萌黄にとって、まさに由々しき事態となった。

受験する大学を選ぶ際も、ただ、むんが受けるというだけでK大学の芸術学部を受けたようなものだ。ものごころついた頃から引込み思案で人見知りする萌黄にとって、むんなしに登校したり、授業を受けたりするなど想像できなかった。

案の定、七月を境に、萌黄はほとんど授業に出席しなくなった。悪くすると家どころか自分の部屋からも外に出ない日が増えた。このことにはむんも責任を感じているらしく、登校を促しに訪問してくれたりしたが、完全な徒労に終わった。萌黄は萌黄で、このままじゃいけない、家族を亡くしたむんに負担をかけてはまずいと思うものの、どうにもならない自分がいて、ますます自律神経のコントロールを失っていくという悪循環に陥っていた。

「で、聞いてほしい話って？」

むんの前にジュースの入ったコップを置くと、萌黄は並ぶように腰掛けた。

「えつとね……笑わんと聞いてくれる？」

「内容によりますなー」

「ううん……それじゃ、右手を挙げてみて」

「ん？——こう？」

素直に挙げられた手に、萌黄はがっかりした。むんの挙げたのは左手だった。

「それじゃあ、ここにむんのフルネームを書いてみて」

親友はわずかに首を傾げたが、何も言わずペンを取り、差し出されたノートへさりと自分の名を書きつけた。

書かれた文字は四つとも、見事に左右が逆転していた。しかも右利きのむんは左手で書いていた。

萌黄は深いため息をついた。彼女の悩みを話したところで、この親友は理解してくれるかどうか。

むんも萌黄の様子にただならないものを感じたようだが、ふと見上げた壁掛け時計に、あつと声を漏らした。

「アカン！ 萌黄、遅刻すんで。今日は後期授業のオリエンテーションがあるんでしょ？」

「そうやけど」

「やけどやないよ。ちゃんと出席せんと」

「わたしも休学しようかな」

「アホなこと言わんといて。さあ着替えて着替えて。話の続きは、道々聞いてあげるから」

そう言われてはしょうがない。萌黄はあきらめて自室に戻ると、パジャマを脱いで外出着に着替えた。

通学用のトートバッグの中を確認する。逆さまの筆入れ、逆さまの財布、逆さまの定期入れ、逆さまの携帯。

萌黄はますます気が重くなった。

6

萌黄の母親との密約を果たすべく、むんは萌黄の手首をしつかりとつかんで、時間通りに彼女を家から連れ出した。

駅に着くまで、萌黄はほとんど目を閉じたままだった。異様な光景を見ないように。耳に入ってくる街の音だけは記憶にあるのと同じだ——方向さえ気にしなければ。

救急車も、しつかりドップラー効果にならって、音程を変えながら通り過ぎていった。

「あたっ！」

引きずられてよたよた歩く萌黄は、ガードレールの出っ張りに膝をイヤというほど打ち当て、悲鳴をあげた。

「ほら、きりきり歩く」

「もう、まるで罪人扱いじゃない」

「似たようなもんよ」

最寄りの近鉄奈良線富雄駅は、歩いてわずか二分の距離にある。通学の面でも、よそに遊びに出かけるにも極めて便利な地の利の恩恵を、萌黄はここ数ヶ月、全く受けておらず、そのせいで自分の身体にカビが生えたよう

な気がしていた。反対にむんは本格的に働き始めたこともあって、ますます大人びて見える。

「わたしは切符買うけど、萌黄は定期持ってたよね」

「ううん、半年経ったから切れてる」

「じゃあ今日買う？」

「どうしよう。買ったのに学校行かなかったらもったいないしなあ」

「ウダウダ言わずに買うべし！」

押し切られて購入用紙を手にしたが、萌黄はそこでまた困惑した。用紙は備え付けの鉛筆で購入者の名前や住所を記入することになっている。裏返しに印刷された用紙には当然、裏返しに名前を書かねばならない。

「ごめん、今日は切符にしとくわ」

「うーむ」

さも難儀な奴だという顔をしたが、それ以上は何も言わず、自ら萌黄の切符を買ってくれた。

プラットホームに駆け上がると、すでに電車は到着していた。駆け込むなり扉は閉まり、萌黄の知るのとは逆の方向へと発車した。

すでにラッシュアワーは過ぎていたので乗客はまばらだ。これなら話しやすい。萌黄はホッとした。

「むん、約束して。ホンマに笑わへんって」

「おもしろい話やったら笑うよ」

「わたしにはおもしろくない。……気持ち悪くて、途方に暮れてんねんから」

「判った判った。さあ話してごらんなさい」

萌黄は意を決して、今朝目覚めてから自分の身に起きたことを、ゆっくりと話し始めた。

自分の周囲の世界が突然左右反対になってしまったこと。部屋の間取りも、持ち物も、そこに書かれている文字すらも。最初は誰かのいたずらかと憤ったけれど、猫のウイルまで逆になっているに及んで、原因は自分の頭にあるんじゃないかと疑い始め、錯乱の一手手前まで追いつめられたこと……。

「そんな窮地にいる時、わたしがやってきた。だからあんなに喜んでくれたってわけか」

「うん」

「右手を挙げろと言うたり、名前を書かせたりしたのも、わたしが逆かどうか確認するため？」

「うん」

揺れる電車の床を見つめたまま、萌黄は消え入りそうな声で答えた。

「ウイルちゃんの顔が左右反対やって言うたね。わたしの顔もそうかな？」

言われて萌黄はぎくりとした。そして、あらためて、むんの顔を正面から見据えた。

「……………」

「やっぱり逆になってる？」

萌黄は膝に目を落としながら、うなずいた。

「むんの目尻のホクロ、左目やったよね」

「右目のほうについてるって言うの？」

またうなずく。それだけではない。萌黄の目はさつきからむんの顔にどことなく違和感を感じていたのだった。その理由がいまようやく判った。

人間の顔が左右対称じゃないのは、なにかの本で読んで知っていた。右半分は親しみやすい顔で、左半分は知的でクールな顔だとも。

いま隣にいるむんの顔は、萌黄の知っているのとは微妙に異なっていた。確かめるため、彼女はバッグから小さな手鏡を取り出し、おずおずと親友を映してみた。

——やっぱり。

鏡の中のむんこそ、萌黄の知る親友の顔だった。

「むん。わたしの話、どう思った？」

「そりゃあ、びっくりしたよ。……まさか学校に行きたくなくて仮病を使ってるようにも見えへんし」

「当たり前ですー」

萌黄は恨めしげに親友をにらんだ。

「としたら原因は何やる。心当たりはないの？」

問い返されて萌黄は、苦悩を帯びた目を窓外にやった。そこには大阪平野を一望する大パノラマが展開していた。はるか大阪湾を背にひろがる大阪の街。それがすべて逆。これが “どつきり” だったら何兆、いや何十兆円もお金が必要だ。

「頭の中が腸捻転、ちようねんてん起こしたとか」と萌黄。

「なんやて？」とむん。

「ごめん……もしかしたら、目で見たものを脳に伝える神経のどこかがひっくり返ったか、こんがらがったか、したんやないかと思うんよ」

「はーん」

「……ずっと飲んでる薬の副作用かもしれんし」

「でもさー、歩いたり、ものに触ったりするのも逆やて感じるんやろ？」

「うん」

「おかしいやん。どうにかなったんが目の神経だけやつたら、触った指先の感覚と目で見たのが噛み合へんのと違う？」

「ああそうか。てことは……」

「萌黄の身体の感覚全部が、いつせいにひっくり返ったことになる……のかな？」

その時、むんの両眼がハッと凍り付いた。気づかず萌黄は非難の気持ちを表明した。

「そんな、そんな怖いこと言わんといてよ。だってわたし、普通にしたら耳から入ってくるのも、指先で感じるのも、いつもと変われへんねんから！」

そして、自分の感覚を確かめるように、頬を両手でピタピタと叩きながら、

「左手で触ったものは左やし、右かて！」

「……………」むんは無言を続けている。

「それにほら、文字かて書こうと思ったら——」

萌黄の言葉がそこで途切れた。

右手の指先は、左の手のひらに字を書こうとしたまま硬直している。

その右手の甲には小さな古傷がある。幼い頃、学校の重い扉ではさんだ時に負ったものだ。

その傷が記憶のまんま、左手ではなく右手にある。

まさにこの瞬間、彼女は真実の一端にたどり着いた。

そして、事の重要性は激しい嘔吐感を伴って、萌黄の脳天に雷を落とした。

電車はちょうど駅に到着したところだった。萌黄は両手で口を押さえると、開いた扉から飛び出していった。

「待って！」

むんが後を追った。

むんは、ドアを跨またいだところでハッと足を止めた。振り返ると、萌黄のバッグが座席に放り出されたままだ。急いでとって返し、バッグをつかみ上げたとき、発車のベルが鳴り響いた。ドアに向かって駆け寄ったが、間に合わないと踏んだ瞬間、彼女は手近な窓ガラスをサッと開け、見事な跳躍力でホームに着地した。高校時代、陸上部で鍛えた足腰はまだまだ現役だ。

萌黄は――？

彼女の姿は十メートルほど向こうにあった。弱々しい背中が、今まさにホームの上に倒れようとしていた。

「危ない！」

自分と萌黄のバッグを肩にかけたまま駆け寄ったむんは、間一髪、萌黄の体を抱きとめた。ふらふらと揺れる萌黄の顔はすっかり血の気が失せ、目を強く閉じたまま、うわごとのように「逆……逆……」とつぶやいている。

むんは舌打ちすると自分を責めた。自分の不用意な言葉が萌黄を追いつめたんじゃないだろうか。いったい何年彼女と付き合ってるのよ！

いや、思い煩うのは後回し。クーラーの効いていた車内と違って、外はまだ残暑がきつい。どこか涼しいとこ

ろで萌黄を休ませないと。

少し離れたところにガラスで仕切られた待合室があった。駅員の手を借りたかったが姿はない。むんは決心すると萌黄の頸くびと両膝に腕を通して、気合一発、よいしょとばかりに持ち上げた。

「お、重い……足、太ふとおなりそ……」

身体じゅうからぶわっと汗が噴き出した。一步二歩と歩き出す。離れたところから若者たちがニヤニヤと好奇心な視線を投げよこしてくる。フン、誰がおまえらの助けなんか借りるもんか！

むんはふと、デジャ・ヴュのような感覚に襲われた。ずっと以前にも似たようなことがあった。小学生の頃、やはりこんなふうに萌黄を抱き上げたことがあるのだ。その時、この子は学校の体育館の重い扉に腕をはさまれ、痛みあまり卒倒した。たまたま近くに先生はおらず、級友たちは驚いて遠巻きに見つめるばかり。むんは彼らを押しのけ、萌黄を抱き上げると急いで保健室へと駆け込んだ。

元々、萌黄とは家が近所で、物心ついた頃から顔見知りだったが、親密になったのはそれがきっかけだった。

ようやく待合室にたどりつき、むんは回想を中断した。

萌黄の頭を柱にぶつけないよう、注意しながら自動ドアをくぐると、ひんやりした空気がふたりを迎えた。

プラスチック製のイスに萌黄を座らせ、むんは自分も横に並んで腰をおろした。うーんと声を出しながら両腕を回転させ、肩の疲れをほぐす。

他に誰もいない静かな待合室。ガラスの向こうを快速電車が通り過ぎていく。

「……むん……ごめん」

か細い声が流れてきた。むんは体を傾けて萌黄の顔のをぞきこんだ。その顔色は相変わらず青白く、眉根に寄せたしわが、めまいと戦っている様子を如実に物語っていた。

「学校、無理そうやね？ 帰ろうか」

むんがたずねると、萌黄はわずかにうなずいて見せ、

「——もう五分だけ、このままいさせて」

いいよ、とむんは応えた。

彼女は静かにイスから立ち上がると、萌黄のそばを離れ、ポケットから携帯電話を取り出した。そしてボタンに触れて人工知能——いわゆる携帯AI——を起動すると、小声で命令した。

「遺族会の責任者さんにメール送って。今日の結団式は急用でパスするって。ていねいな言葉でね」

液晶画面には愛らしいリスの動画が浮かんでいた。リ

スは“オツケー”と高い声で返事すると、尻尾を丸めて宙返りを始めた。

一回、二回、そして三回転したところで“送ったよ”とリスはウインクした。むんはうなずいて携帯をしまった。

それでも参加を促すメールが来るだろうな。それを予期して、むんは携帯の電源をオフにした。今は萌黄の心配に集中したい。彼女は親友のそばに戻った。

いったいこの子の身に何が起きたのか？

世界のすべてがひっくり返った。そう萌黄は言った。鏡に映したように左右が逆転したという、聞くからに奇妙天烈な話。さすがにすんなりと信じることはできなかった。彼女の持病ともいえる自律神経の不調が起こした一時的な混乱だと思っていた。ついさっきまでは。

萌黄の右手の甲の傷に目がいくまでは。

その傷こそ、むんと萌黄の友情のあかしでもある。

あの日、傷口からだだらだと血を流していた萌黄を保健室に担ぎ込んだのは、他の誰でもない、むん自身だ。今でもその時のことは鮮明に記憶している。だからはつきりと断言できるのだ。彼女の傷口は右手にあったと。

なのに——なのにどうしたわけか、今、萌黄の傷痕は、左手の甲にある。右手の同じ部分は傷痕一つない。

それに気づいたとき、むんの背中に戦慄のようなも

のが走った。おかしくなったのは自分の方ではないかと思っただけだ。

なんだかイヤな予感がする。理由はないけど、このままじゃ済まないような……。

サイレンの音にむんは我に返った。駅の外で「道を空けてください」とスピーカーの声が連呼している。どうやら渋滞に巻き込まれた救急車がいるらしい。気の毒に。同じく気の毒な萌黄が身じろぎした。むんが顔を近づけると、萌黄の目がうつすらと開いた。眉間に刻まれた縦縞はそのままだ。

「楽になった？」

「あんまし……でも立てると思う」

「そっか」

むんはしばらく親友の顔色をうかがっていたが、わざとらしく背筋を伸ばすと、

「ほなレッツ・ゴー・ホームや！」

と元気な声を張り上げた。萌黄の顔がわずかにほころんだ。

9

午前十一時五十五分。

東京、新宿アルタ。

今日も7階スタジオアルタには二百人以上の観客が詰めかけ、本番が始まるのを今か今かと待ちかまえていた。『ハモっていいとも』。

全国ネットで生放送されるお昼の人気バラエティ番組である。

舞台上手のすぐ裏では、ADの村上健太が本番前のあわただしい空気の中にいた。フジテレビの看板番組。そのADをつとめて一年になる。「現場に慣れても、仕事に慣れるな」という先輩のありがたい言葉を噛みしめつつ、日々新たな気持ちで仕事に臨んでいる。それでも本番直前のこの時間、いつもの位置にいつものスタッフや出演者がスタンバイする姿を見ると、緊張の中にも安心した気分になれる。

しかし今日はどこか勝手が違った。

原因は判っている。

村上は不安げな視線を前方に立つ男の背中に送った。

この番組の司会を長年つとめてきた通称ハモリこと、森葉一芳氏。いつもは本番前でも周囲の緊張を和らげるために軽口を叩く彼が、今日に限って物静かだ。楽屋入りしてからずっと人前に出てこなかったのも彼らしくない。番組はいつも彼の美声がコーラス隊とハモるところからスタートする。声の調子でも悪いのだろうか？

「ハモさん、よろしいですか？」

村上はたまらず声をかけた。

「ん？ ああ大丈夫……」

抑揚のない返事が返ってきた。まるで心ここにあらうと
といったような。

《三十秒前です》

インカムの声に、村上はいつになく心臓が高鳴るのを
覚えた。こうなったら調子が悪かろうと何だろうと、ハ
モリにすべてを託すしかない。芸歴の長い彼は、これま
で生の現場でどんな状況に遭遇しても、そつなく見事に
切り抜けてきた。自己管理においても徹底している彼の
こと。大丈夫だと言えば、まず間違いはないだろう。よ
ほどのことがない限り。

《三……二……一……》

ジャーン。番組が始まった。テーマソングが流れ出す。
ハモリの足が動いた。低い階段を昇り、ステージに設
営されたゲートをくぐり抜けて観客の前へ、そしてテレ
ビの前へ姿を現した。

まばたきも忘れて村上は、モニターに映るハモリの姿
を凝視し続けた。左手にマイクを持ったハモリの上半身
が少しずつアップになっていく。

はて、ハモさんは右利きだったはずだが――？

トレードマークの黒のサングラスの下表情は読みと
ることができない。それでも頬が妙にひきつっているよ

うに見えるのは、モニターの調子が悪いせいかな？

テーマソングが流れ続けている。しかしハモリは一向に口を開こうとしない。やや前方下を見つめたまま舞台の中央で棒立ちになっている。

リズムに合わせて手を叩いていた観客たちも様子が違うことに気づいたようだ。手拍子が弱まり、ざわざわという声がひろがり始めた。

「どうしたのー」

「ハモさーん」

不安そうな掛け声にも、ハモリは微動だにしない。

村上の背後も急に騒々しくなった。数人が「放送事故か？」と叫びながら駆けていく。自分もADとして動かねばと思うが、魅入られたようにモニターから目が離せない。

こんな事態は初めてだ。村上のこめかみを汗がしたたり落ちる。にぎやかなテーマソングもいつか消えている。モニターに、共演のタレントたちがぞろぞろとステージに出てくるのが映った。スタッフよりもタレントたちに助け船を出させようと上が判断したのかもしれない。

「ハモさん、どないしたん？」

一人がハモリの肩に手を置いた。するとそれが合図になったかのように、ハモリはぐいとあごを上げ、正面のカメラを見据えた。そしてマイクを口の前に持つてくる

と、静かな口調で話し始めた。

「——みなさん、聞いてください。私が今朝起きると、目の前の世界がひっくり返ってしまいました——まるで鏡の中のように、すべてが左右逆になっていたのです。家の中も、街の中も、本に書かれている文字も、何もかもがです。」

——私の頭はおかしくなったのでしょうか。昨夜眠っている間に右脳と左脳が入れ替わったのでしょうか。それとも視神経がこんがらがってしまったのか……！」

ハモリは言葉を切った。

あたりは水を打ったようにシーンとしている。未だかつてこの番組がこれほど静かだったことがあるだろうか。スタッフの全員が、二百人あまりの観客たちが、しわぶき一つ上げず、ただただハモリの言葉に聞き入っていた。いや視聴者を含めれば数十万人になる。

ハモリは再び口を開いた。その声は明らかに強ばっていた。

「——ところが、私は気がついたのです。私は右利きです。いつもマイクを右手に持ちます……みなさん！ 私のこの手は右手ですか？ 左手ですか？」

ハモリはすぐそばにいた芸人の一人に向き直り、マイクを握った手を付きだした。芸人は、

「へへへ、ハモさん、これギャグ？ なんでわざわざ左

手で持つてるん——」

芸人の言葉が終わらないうちに、彼の右頬にハモリのマイクを握った拳が飛んできた。芸人は悲鳴を上げて床に倒れると、モニターの外に切れていった。

とたんにスタジオが嵐の渦に巻き込まれた。ハモリは半狂乱のまま、それでも何事かを訴えようとしているが、すでにマイクを放り出してしまったので音声拾えない。周囲は彼を舞台裏に戻そうとするタレントやスタッフらでごった返す状態となった。観客のある者たちはヤジや怒号を投げつけ、ある者たちは雰囲気恐れをなして、出口に殺到している。

ようやく画面に“しばらくお待ちください”が出た。

この文字が逆？　どういうことだ？

村上にはハモリの真意も意図も理解できなかった。ただ、この長寿番組は今日をもって終了するかもしれないと思い続けていた。

10

内閣総理大臣・山寺鋭一は、祈るような気持ちを胸に、
人気のない廊下を急いでいた。

まさかこれほど早く事態が悪化するとは予想していなかった。できれば誤報であってほしいのだが。

《北海道消失事件対策本部・別室》

目指す部屋の入口にはそう書かれてあった。もともと地上にある本部は建前的なもので、こちらが本当の本部なのだ。

自動ドアをくぐると、いきなり騒音の洪水にさらされた。部屋の中にはコンピュータの端末がずらりと並び、何十人も人間が刻々と集まってくる情報を収集、整理し、あるいは検証していた。別の区画の電話ブースでは、女性たちが次々に寄せられる報告の応対に大わらわだった。

一週間前に訪れたときは、あれほど静かだったのに。やはり事態は最悪の結果を招いてしまったのか？

「総理、こちらです」

大声で彼を出迎えたのは、内閣情報調査室長の江守だ。すぐ脇には苦虫を噛みつぶしたような顔の笹倉防衛庁長官もいる。

「起こってしまったのか？」

やはり開口一番、それを確認せずにはいられない。

「はい、残念ながら。今朝の午前五時二十八分でした」

「そうか——」

山寺は落胆の色を隠せないまま、二人の向かいの一人掛けソファに腰を降ろした。

「ということは、この私の身体も、本当は左と右が逆に

なってしまったのか？」

「はい——誠に遺憾ながら」

「くそっ！」

山寺は目の前の机をドンと叩いたが、

「——すまない。君たちだって同じなのにな」

「いえ……」

笹倉が無念そうに、自分の両手を見つめている。

「総理、とりあえず現状をまとめておきました。目を通していただけますか」

江守が差し出したのはレポート用紙だった一枚の報告書だった。そこには非常事態に陥ったことを証明する出来事が箇条書きにまとめられていた。

読み終えた山寺は、深いため息をついた。顔を近づけた江守がさらにたたみかける。

「特にその一点目に関しまして、すでに各地から数多くの報告が入っております。新種の伝染病ではないかと疑念を抱いている病院もあると」

山寺はうなずいた。それはあらかじめ想定された範囲内の反応ではある。だがこの先、ますます混乱がひどくなれば——。

そんな思いを振り払うように、山寺はことさら毅然とした顔つきで腰を上げた。

「ただちにB作戦を発動する！ 江守君、準備はできて

いるな？」

「はい。すでに部隊は全員、集結しております」

「よろしい」

続いて山寺は笹倉を振り返ったが、思わず言葉を詰まらせた。笹倉はあられもなく泣きじゃくっていたのだ。

「防衛庁長官！ 君がそんな体たらくでは困るな」

山寺は三十年来の友人であるこの小心者に、苦笑を混じえた声を投げかけた。

「す……すみません、総理」

「君の嘆きは判らないではない。だが今こそ文字どおり、国民のために一身を投げ出す気概を見せてくれねば」

笹倉は総理の言葉に何度もうなずいたが、しばらくは立ち上がれそうにもない。

山寺は、壁の大型液晶スクリーンを見上げた。そこには北海道を除く日本地図が表示されていた。色分けされた点が各種情報の出所を表している。

すでに事態は、北海道消滅どころか、日本の存亡に関わるところまで来てしまった。しかも、仮にもしB作戦が成功したとしても、われわれは歴史に名をとどめることはない。われわれに未来は存在しないのだ。

笹倉の醜態は彼だけのものではないだろう。おそらく大多数の日本人が同じ反応を示すに違いない。果たしてB作戦がうまく機能するのかどうか。

「総理！」

一人の若者が端末の間を縫って駆け寄ってきた。

「総理、いますぐテレビをご覧ください！」

「テレビ？ ニュースかね」

「いえ……『ハモっていいとも』という番組です」

地図の横の百インチ液晶テレビのスイッチが入った。
にわかに部屋全体が静かになり、誰もが画面に食い入った。

『みなさん！ 私のこの手は右手ですか？ 左手ですか？』

国民的タレント、ハモリの悲痛な声が、部屋全体に響き渡った。そして画面は混乱するスタジオを隠すように
《しばらくお待ちください》の静止画に切り替わった。

「盛大にやってくれましたね。これじゃいたずらに混乱を煽るだけだ……」

江守がうめくように言ったが、山寺は反論した。

「いや、これは幸先がいいと言うべきだ。わずか六時間で一人目の“リアル”が発見できたんだからな。

——いますぐ、新宿に部隊を送り込め！」